

平成30年度第1回介護ロボット等導入実証ワーキンググループ会議
会議録

1 開催日時

平成30年7月5日（木） 10:30～12:00

2 開催場所

クラウンパレス小倉 3階 ダイヤモンドホール

3 出席者（五十音順）

泉構成員、岩井構成員、柴田構成員、曾我構成員、橋元構成員、蜂須賀構成員、福島構成員、山本構成員（欠席：伊藤構成員、田代構成員）

4 オブザーバー

【実証施設】

（社福）孝徳会 サポートセンター門司・中村施設長、

（社福）広寿会 足原のぞみ苑・片桐施設長、

（社福）援助会 聖ヨゼフの園・木戸施設長、

（社福）無何有の郷 杜の家・中村施設長

【厚生労働省】

老健局介護ロボット開発・普及推進室 田口室長補佐

5 会議経過

【報告1】介護ロボットの開発と普及の好循環の創出に向けて

—介護現場の革新を目指して— 資料1

○厚生労働省老健局介護ロボット開発・普及推進室 田口室長補佐より説明

【議題1】平成29年度下半期の取り組み結果について 資料2

○事務局より説明及び下半期の実証施設の施設長より感想

《意見等》

構成員：足原のぞみ苑におけるSASUKE（サスケ）はどうだったか。

施設長：多床室で部屋が狭いことが難点であったが、高齢者でも時間がかかっても1人で出来ることは良かった。

構成員：聖ヨゼフの園におけるHug（ハグ）はどうだったか。

施設長：ハグはまだ現場で使っていくには課題が多いと感じた。

構成員：杜の家における移乗アシスト装置はどうだったか。

施設長：寝たきり、全介助の方が多いので、職員の身体的負担は軽減された。

【議題2】平成29年度下半期の作業分析結果について

資料3

○産業医科大学の泉准教授より説明。

《意見等》

構成員：作業観察した3施設の間で何か差があるのか。

泉准教授：多床室とユニットケアで業務内容や作業のやり方に差がある。

構成員：バイタルチェックの時間が増えているのはポジティブな理由か、それともネガティブな理由か。

事務局：施設職員にヒヤリングをしたところ、バイタルチェックがこれまでより簡単にできるようになり、バイタルチェックをする頻度や人数が増えたということでポジティブな理由であった。

構成員：ロボットを使用した移乗のスリング時に作業姿勢（OWAS）が悪い結果となっているが、介護ロボットマスター講習では介護ロボットの適切な使用方法について教えているのか。

事務局：介護ロボットマスター講習でも教えているし、機器の導入後に施設の職員同士でも研修を実施している。

泉准教授：スリングを通す作業は前屈姿勢になるので、介護機器やベッド等の改良・改善も必要。

構成員：3～5ページで各施設の作業内容をまとめた円グラフがあるが、職員の食事・休憩時間が少ないと感じる。ロボット使用に時間がかかって休憩が減っているのか。それともほかに理由があるのか。

泉准教授：ロボットの使用による影響というよりも、作業観察の方法として、多床室でもユニットでも観察場所に対象の職員がいない場合には観察時間から外している。観察場所で休憩していた場合のみ記録されているのでそれが理由だと思う。

構成員：先ほど説明があったアンケートの中でインシデントが入ってなかった。

事務局：インシデントという項目はなかった。今後検討したい。

構成員：今後、作業分析をするにあたっては特定の部分の有効性に絞ったほうがきちんとした詳細のデータがとれるのではないか。

泉准教授：今後の作業分析のやり方については検討したい。

【議題3】平成30年度の取り組みについて

資料4

○事務局から説明

《意見等》

構成員：多床室とユニット型では、人の配置が違う。また、施設ごとにハード面も含め環境にも差があるので、今後、作業分析を進めるにあたっては、1つの施設に絞って前後比較をしたほうが良いのではないか。

構成員：高福協の会議でも介護ロボットの有効性について議論を行っている。最近、現場職員の介護ロボットに対する考えに良い変化が出てきている。特に、記録については、将来的に医療・介護が一体のものになり情報共有化が図れると良いと思う。

構成員：これまでに14機種の介護ロボットを導入実証しているが、今後も増やしていくのか。また、実証を在宅も含めて広げていく考えがあるのか。

事務局：介護ロボットについては、効果の見込めるものに絞って実証していく予定である。

実証フィールドについては、特別養護老人ホームから始めたが、今後、増やしていきたいと考えている。

事務局：既存の機器は今後増やす予定はないが、現場のニーズに即して新しく開発された機器等は導入していきたい。

構成員：介護ロボットも福祉用具のようにレンタルが可能となると利用者も助かると思うので、そうした検討もしてほしい。

構成員：ロボットの活用が職場の活性化につながるようにしてもらいたい。また、職場の研修、マニュアル作りをして欲しい。

構成員：情報機器が役立つという話があったが、介護ロボットは職員だけでなく、対象となる利用者の障害にマッチしているかが大切。

人材育成については、PTの助言をもらったり、ロボット選択のノウハウもしっかりと教えるということをお願いしたい。

構成員：看護の現場でもロボットに対する期待がある。看護も介護もロボットが役立つ部分が必ずある。

構成員：介護ロボットを現場に導入するためには全体を最適化する必要があり、それぞれの専門事業者が関わる必要がある。

ロボット開発にあたっては、はじめから使う側の意見を取り入れて開発することが重要。

構成員：医療と介護の連携の話が出ていたが、どちらも在宅指向である。近い将来介護ロボットを在宅に導入する際にどのような課題があるのか。導入にあたっての適正化の検討も進めていかないといけない。

構成員：介護ロボットを在宅にということは家電のイメージだと思う。難しい操作を高齢者に覚えろというのは難しい。簡単に操作可能なロボットが必要になる。

構成員：今後、介護ロボットの有効性を示すためには絞ったものにしたほうがデータを取りやすい。

事務局：本日のご意見も踏まえて、取り組みを進めていく。